
異世界奴隸

涼風黒兎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界奴隷

【Nコード】

N0096BA

【作者名】

涼風黒兎

【あらすじ】

異世界トリップしたはいいけれど…恐らく奴隷って奴なんだろう。色々不満はあるけれど…死ななきゃ安いつて奴だ。

プロローグ

「はあ、俺が何したって言うんだか」

呟いたのは鉄格子の内側。

牢屋の中の上に、手錠までかけられた状態。

更に、予想するならば此処は異世界。

「確かに、真つ当とは言えない人生だったけども、此処まで悪化するとは…」

異世界トリップの基本は魔法でだったり神の恩恵だったりで言葉が通じるってのがお約束。

だが、俺にはそんな能力も無く、いわゆる異世界チートも存在せず。更にステータスが見れるなら”不幸”の称号が付いてるんじゃないかってぐらいだった。

「どうせ、今日も何も無いんだろうな」

格子の向こうに広がるのは異世界の風景 なんかじゃなくてただの石の壁。 なんかじゃなくてた

薄暗い石造りの廊下の壁で、首を回せば両隣にも似た様な格好をした男の姿。

…つまり、俺は異世界で奴隷って身分に身を落としたって訳であった。

どうせ客が来ても何を言ってるか判んないし、こっちからの言葉も通じないだろうし…

寝てるとムチでしばかれるっばいから、回想でもしてる事にしよう。

そう、あれは三日前の事。
俺はバイトから家に帰って来る最中の事だった。

「あー…今日も良く働いたわー」
バイト先^{コンビニ}から出た所で伸びをする。

働いた、と言っても人も中々来ない深夜帯の上にまだ夜が明け切る前、まだ深夜って呼ばれる時間帯までのバイトだから楽なだけだ。

とりあえず煙草に火を点けて帰る前にバイト先の前で吸って行きたいが…店の中から後輩が睨み付けて来るので諦めて帰ろう。
歩き煙草はマナー悪いから皆やつちゃダメだぞ
なんて考えながら通りなれた帰り道を歩いていく。

「あ、そうだ…」
帰り道の途中にある自動販売機の前で立ち止まる。

今日は廃棄の弁当しか無く、飲み物はバイト先で買っていない。
故に買っておこうと自販機の前で財布を取り出そうとして、金属が落ちる音がした。

「あれ、財布から小銭落としたか？」
眩きしゃがみこむと自販機の下に金属らしき光が見える。
落とした小銭か、誰かが落とした小銭か知らないが気にする事は無い。

拾ってしまえばこっちの物だ。
「…ま、届くだろ」
手を伸ばせば金属独特の冷たさが指に伝わって。

そのままぐるりと世界が回った。

「は？」

酩酊するような感覚。

まるで吐き気を覚える様な感覚の中、世界が切り替わり背中から地面に叩きつけられた。

「……………気持ち悪いし、今何が起きた？」

気持ち悪さを抑えなんとか起き上がれば、パツと見森の中。

明らかな異世界トリップである。

「わーお……………こんな異世界トリップ、神隠しって言うかなんだろ
うな」

気持ち悪いが初…いや、何度もあつたらそれはそれで嫌過ぎるが…
異世界に興奮気味である。

「いわゆる異世界チートって何か無いのかな…それに美少女の出会いとかさ！」

立ち上がり辺りを見回しても暗闇には木と草、それに地面しか見えない。

なにやら空気は美味い。

排気ガスなんか汚染されていないからだろうか。

昔、林間学校なる行事で行った八ヶ岳や、富士山の周りのなんとか
とか言う山と似た様な感じだ。

いや、そんなに記憶に残っている訳じゃないが。

「ま、なる様になるだろー」

と、とりあえず温める機械も無し、賞味期限が近いと言う事で手に
持った弁当を食べる事にした。

数分後食べ終わる前にとある、出来事により、必死になって木を上
っていた。

……………日本じゃないし、自然の中だし、気をつけるべきだったんだ
よね。

「やばい、でかい、怖い、オオカミとかマジ怖い、犬じゃなさそうだしやつぱりあれオオカミだよな」

姿を現したのは1メートルほど？の体長を持つ大きなわんこ…では無くて恐らくオオカミの群れ。

半分ほど残っていた弁当は既にオオカミの腹の中。

まだ、お腹を空かせたらしいオオカミさん達は勿論俺を狙って木の下に。

木の下ではオオカミがガリガリと木の皮を削ったり、唸りながら木の周りをグルグルと回ったりしている。

「そのまま、バターになっちまえ」

毒づいた所で何の影響も無い。

とりあえず数を数えてみれば8匹。

そりゃ大の大人が食べて二つとか食べれる弁当の半分程度じゃ8匹のオオカミの胃を満たすには勿論足りない訳で。

「さて…どうするかなあ」

異世界チートがある、と言うのならオオカミ8匹程度どうとでもなるだろう。

但し、あるのかどうかは命をベットした危険な賭けだ。

流星に異世界に来て数十分で死ぬ、なんて事はしたくない。

ならばどうするか？

決まっている、生き延びる為に足掻くだけである。

「誰かー助けてくれー」
叫ぶ。

誰か人が通ってくれば助かる事もあるかも知れない。

そうでなかったら、オオカミが飽きるまで此処にいるか、オオカミのお腹の中にインって事だ。

喉も渴いてきたから、そう長くは持たない。

「誰かー！誰か助けてくれー！」

武器も無し、戦う術も無しの日本人じゃこんな物だと言う事だ。

暫く叫び続けていると、オオカミの何匹かが耳を立てたのが見えた。ドツ！つと言った感じの鈍い音を立ててオオカミが突然倒れる。突然の事で何が起きたのか判らなかつたが、オオカミが散る。

誰かが助けに来てくれたのだろうか。

喉も嚔れ始めている状況ではありがたい事だ。

「た…助かった、かな？」

森の中に見えた明かりに辺りを見回し危険は無いと判断し木を降りる。

歩いて来たのは”如何にも”な数人の冒険者、あるいは傭兵の姿。どちらかと言えば傭兵の方がしっくり来るかも知れない。

リーダーらしき人物は背に斧を背負い、胸と腕に金属製の鎧を身に着け、上体には革らしき鎧を着こんでいる。

と言った感じで数人の人物が居た。

彼らは皆金髪や、茶髪…一人は緑色の髪（光合成でも出来るのだろうか）で、明らかに異世界だろうなと実感できる。

異世界だろうし下手な行動は取れないが、お礼をするぐらいは問題ないだろう。

「助かった、ありがとう」

短く言って頭を下げる。

異世界なら、これだけでも物語が進むものだ。

頭を上げるとリーダーらしき男が何を言っているのか理解できない…といった様子で顔をしかめて、後にいる連中も何だか判らないと言った様子でひそひそと話し合っている。

…え、まさか言葉が通じないと言った様な状況だろうか。

リーダーの男がため息を吐く。

「
」

何かを言うが、理解できない…英語も中学生レベルでしか判らない俺に判別しろと言われても困るのだが、俺の知っている言葉では無

かったのが事実。

つまりは、日本のあった世界…世界の名前は判らないが…つまりは言語形体が違うと言う事だ。

「
」

リーダーの男はやれやれと首を振り手招きをする。

とりあえずは付いて来いつて事なんだろう。

「わかつ」

頷いて、通じないだろう言葉を放った瞬間に頭に強い衝撃を受けた。一瞬だけ見えたリーダーの男の口元に下卑た笑みが浮かんでいたのは気のせいだろうか。

目が覚めると其処は馬車？であろう中でした。

夜は明けて、明るい日の光が流れる景色を映している。

衣類は剥ぎ取られて居なかった物の、明らかな牢屋の中で、鉄格子が世界と隔てている状況。

簡単な手錠がかけられていて、その先には目に光の無い少年。

これはつかまつたと言う奴だろう。

しかも異世界に於ける最悪のパターンで。

…でも暴れたら、悪くなるだけだから、と言う思考。

「…お、ポケットの中のものも無事だ」

呟く。

隣の少年がちらとこちらを見た気がするが、気にせずに煙草とライターを取り出す。

どうせ見つかつたら奪われるだろうと言う覚悟で煙草を啜え、ライターで火を点ける。

深く、肺の中に紫煙を吸い込む。

少年が目を丸くしている。

ライターが魔法のアイテム、あるいは超便利グッズとして見られるのは異世界の常だから仕方無いか。

「お、リーダーさんだ」

馬車の外に先程？のリーダーの姿がある。

護衛だろうか、何て思いながらボーっと見ているとリーダーらしき男と目が合う。

多分啜えている煙草に眉をしかめつつも見なかった事にしたらしい。どうせ良くあるパターンで黒髪に黒目は忌避すべき対象として、とかなんだらうな。

「…何にせよ生き延びただけ僥倖だ、剣呑剣呑」

意味は合っているか判らないが呟いてみる。

そうして、流れる景色を見ながら一日が過ぎた。

途中で出された食事はまさに人が撲殺できそうな硬いパンに薄い塩味の豆入りスープ。

食事が出るだけありがたいと、もそもそと胃の中に収めた。

数日後、街らしき場所に着き俺はいわゆる商館らしき場所に運ばれた。

そして牢屋に入れられて、現状に至る…と。

幸か不幸か、服なんかはそのままで、荷物も取られなかった。

それだけが救いかな、等と思いつながら薄暗い石畳の廊下を眺めながら今日も一日を過ごす。

異世界らしいといえば異世界らしいが俺はこんな異世界トリップは望んじやいなかった

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0096ba/>

異世界奴隷

2011年12月31日04時47分発行